

# 『失われた世界』における チャレンジャー教授の横顔

～帝国主義、ダーウィニズム、そして冒険小説～

加 藤 麻 衣

## 序 章

本論文は、『失われた世界』において、チャレンジャー教授が非常にユニークなキャラクターとして書かれている理由を明らかにすることを目的とする。まずは第一章で、物語の中からチャレンジャーの特徴を取り上げて、天才的頭脳を持った猿人だという見方ができることを示す。猿人とは何か、また、チャレンジャーを形作る社会背景を探っていく。それから第二章で、物語世界を客観的に見ていく。物語のテーマとなっている植民地主義への理解を深め、それを行った英国紳士とはどんな人のことを言うのか、植民地主義が正当なこととされていた理由を説明する。最後に、植民地主義時代の英国紳士の役割とこの物語でのチャレンジャーの役割を関連付け、それに第一章で取り上げたことも含めて検討していく。

『失われた世界』のあらすじは、概ね次の通りである。新聞記者エドワード・マローンは恋人のために何か英雄的行為を求めているとき、上司から動物学者チャレンジャー教授に会いに行くように言

われた。そこで彼は恐竜が存在しているという話を聞いたのだった。チャレンジャーが、アマゾン川流域地方の動物を調査しに行った帰り道に立ち寄ったインディアン部落では、一人のアメリカ人が息を引き取ったばかりだった。チャレンジャーは彼の遺品の中に、絶滅したはずの恐竜が描かれているスケッチブックを発見した。彼はその謎を解くために死亡したアメリカ人がやって来た方角、インディアンの伝説でクルプリという森の精がおり恐れられている場所を目指した。彼はその場所で恐竜が現存していることを確認し、その証拠として、翼竜を見つけて射止めた。しかし、帰りのボート転覆事件で証拠は消えてしまった。そのため、恐竜の存在を主張しても信じてはもらえなかったということだった。チャレンジャーは次の動物学会で、恐竜の存在を証明するために旅の仲間を募った。そして、比較解剖学者サマリー教授、冒険家ジョン・ロクストン、新聞記者エドワード・マローンとともに旅立ち、苦勞の末にようやく失われた世界のある台地に辿り着いた。しかし、裏切り者の従者によって帰り道がなくなり、この地に閉じ込められてしまった。彼らはこの地を探検する中でさまざまな絶滅動物を発見することができた。ある朝、彼らは突然猿人の群れに襲われたことで、この地は猿人とインディアンが住む土地であることを知った。彼らは対立しており、いつも争っていたのだった。チャレンジャーの説明では彼らはそれぞれ違う時期に同じ道を通して台地が上がってきたということである。チャレンジャーたちはインディアンに見方して、凄まじい戦いの後、野蛮な猿人を退治することに成功した。そして、インディアンと友好関係を築きながら生活していたのだが、地上に通じる道は教えてもらえなかった。そんなときに、ついにチャレンジャーは脱出方法として気球を作り出し、仲間を喜ばせた。しかし、親切なインディアンにより、道を教えてもらうことができたので、チャレン

ジャーたちはその道を通して失われた世界から脱出した。その際に、チャレンジャーは翼竜の子供を、ジョン・ロクストンはダイヤモンドの原石を持ち帰ってきた。後に行われた動物学会の集会では、チャレンジャーが持ち出した翼竜により、大騒ぎになったのだった。

『失われた世界』の作者アーサー・コナン・ドイルは1859年5月22日にエディンバラに生まれた。両親がカトリック教徒のためイエズス会が経営する学校に通った。1868年から二年間はホダーの予備校へ、1870年から五年間はパブリック・スクール、ストーニーハースト校へ通った。その後、一年間はオーストリアの学校に留学し、1876年エディンバラ大学の医学部へ進学し、シャーロック・ホームズのモデルとなったジョセフ・ベル教授やチャレンジャー教授のモデルとなったラザフォード教授に出会った。卒業後には開業医として生活を送りながら副業として文筆活動も行っていた。その後、医者を辞め文筆活動に専念することになるのは1891年からである。彼はシャーロック・ホームズの作者として有名だが、ホームズが初登場したのは『緋色の研究』（1887）である。これを書いたときのドイルはホームズで作家として成功しようなどとは思っていなかった。彼は子供の頃から歴史小説に関心があったので、歴史小説で認められたいと願っていたのだ。しかし、ホームズ人気が高まってしまったため、ドイルはホームズを殺してしまった。だが、十年後の1903年から、読者のためにまたホームズを書き始めたのだった。小説家としての活動以外にも彼が活躍した場所はあった。1900年ボーア戦争の時に医師として南アフリカに行き、帰国後に『大ボーア戦争』を書いた。その後、戦争が長引いてジャーナリストによりイギリス軍は非難され、世界各国で反英感情が高まったが、ドイルがイギリス軍を擁護する『南アフリカ戦争——その原因と行動』を書いてそれを沈めた。そのことでナイトの称号を受けたのだ。その

他に、ドイルが探偵の役割を果たしたジョージ・エダルジ事件もある。これはドイルが事件を調べなおし、罪を着せられたエダルジは無罪だということを証明した事件だ。晩年のドイルは心霊主義者として各地で講演を行った。そして1930年7月7日に亡くなった。

## 第一章 チャレンジャーとは何者か

### I チャレンジャー教授

第一章では、『失われた世界』におけるチャレンジャー教授について分析する。チャレンジャーとはこの物語の主人公であって、南米の奥地にある失われた世界の恐竜の存在を固く信じている動物学者である。この物語を読んだことのある人なら、チャレンジャーは非常に印象に残る人物だと感じるのではないか。チャレンジャーという奇妙な名前、他の登場人物と比べると詳細に描かれている容姿、性格の特徴から彼は一般の人とは違うイメージが浮かぶだろう。それゆえ、チャレンジャーとは何者か、彼はどうやって作られたのかをこの作品が書かれた当時の社会背景から探っていく。

物語の中で、困難な状況に陥った場合に、それを救うのはいつもチャレンジャーの役割だ。彼は驚くべきアイデアを思いつくことで仲間たちを救うのである。しかし、最大の危機であった猿人に襲われる場面だけは違った。その場を救ったのは彼の天才的頭脳ではない。それを救ったのは、まさに猿人といえる彼の容姿であった。彼が猿人に似ていなかったら、その場を救うことができないためにこの物語は進まなかったのである。次にあげる引用文が、猿人に襲われて、チャレンジャーたちが殺されてしまうのかと思われたときの場面だ。

ぼくはてっきり一巻の終わりかと思ったんだが、どうやら風向きが変わったらしい。連中はしばらくみんなでペチャクチャやっていたが、やがてチャレンジャーのそばにいた一匹が立ち上がった。きみは笑うかもしれないが、この両人は親せきみたいによく似ているんだよ。(p. 231)

そこから、チャレンジャーは何者なのかということを考えたい。彼の容姿は非常に詳細に書かれている。これほど詳しく書かなくてもよいのになってしまうほどだ。そして、猿人の王の容姿もまたチャレンジャーと同じように強調されていることから、チャレンジャーは猿人だと示唆することができる。猿人の村に連れて行かれた後で、ジョン卿とサマリー教授が手荒な扱いを受けているのに対して、チャレンジャーが自分の猿人的容姿を利用した振る舞いをしている場面があるので見てほしい。

チャレンジャー先生は木の上でパイナップルを食べながら、わが世の春を楽しんでいたというしだいさ。もっともぼくらにも果実を少し手に入れてくれたし、縄の結び目をゆるめてもくれたがね。彼が例の双生児の兄弟といっしょに仲よく木の上にすわり、割れ鐘のような声で“鐘を打ち鳴らせ”かなにかを歌っているのを見たら—というのも猿人たちはおよそ音楽と名のつくものならなにを聞いても機嫌よくなるからだが一きみだって、きっと吹きださずにはいられまいよ。(p. 233)

そういうことからチャレンジャー＝猿人だと考えられるが、しかも彼は単なる猿人ではなく科学的知識を身につけている。そこで、天才的頭脳を持った猿人と仮定することから議論を始めていく。

天才的頭脳を持った猿人とはどういうことか。チャレンジャーは猿人的容姿、そして独創性の頭脳を持ち合わせた人物だと言える。まずはチャレンジャーの猿人的容姿から見ていこう。物語の中から、チャレンジャーの容姿がよく描写されているものとして、新聞記者エドワード・マローンがチャレンジャーに初めて会ったときの感想を見てほしい。

まさかこれほど圧倒的な人物だなどとは思いませんでした。まずハッとさせられたのは彼の大きさ—その大きさと人を威圧するような容姿だった。その顔はものすごくでかく、わたしがそれまで見た人間の頭のうちでいちばん大きいものだった。もしかりに、わたしが彼の山高帽をかぶったとしたら、きっとその帽子はわたしの頭をすっぽり隠し、肩にのっかってしまうことだろう。彼はちょうどアッシリア雄牛そっくりの面構えをし、またそっくりのあごひげをはやしていた。つまり、前者は赤らんでおり、後者はいくぶん青みをおびた漆黒で、スベード形をし、胸の上までたれ下がっていた。髪の毛がこれまた奇妙で、長い曲線を描いた束になり、がっしりした額にべったりとくっついていて、大きな黒いゲジゲジ眉の下には、青味がかかった灰色の目があり、非常にすんでいて、とてもせんさく好きな高慢な感じであった。長い、まっ黒な毛におおわれた二本の大きな手を除いたら、テーブルの上に見えている部分は、幅広い、がっしりした肩と、樽のような胴体だけだった。これと、獣のほえるというか、うなるというか、そんなガラガラ声が、悪名高きチャレンジャー教授の第一印象を作り上げていた。(pp. 34-5)

もう一つは、マローンが新聞記者であることがチャレンジャーに

ばれてしまい、記者が嫌いなチャレンジャーが怒って立ち上がった場面である。それが以下のマローンの感想だ。

そのハッとした瞬間でさえ、彼がひじょうに小柄な男で、彼の頭はわたしの肩の上にも出ないほどであることを発見して、おかしがるだけの間はあった—その無限の活力は、すべて深さと、幅と、脳みそのほうにいつてしまったような、発育の止まったヘラクレスともいった感じだった。(p. 38)

このような引用文から彼は一般の人とは少し違った容姿をしていることが十分にわかるはずだ。一つ目の引用文だけを見れば、チャレンジャーは体つきががっしりしているために、背が高いイメージをしてしまうと思う。しかし、実際は二つ目の引用文を見るとわかるように、彼は非常に背が小さいのだ。これら二つの引用文から、なぜこんな奇妙な容姿なのかと疑問が浮かび上がるのだが、これはやはり彼は猿人として書かれているからなのである。それは次にあげる二つの引用文から理解できるだろう。一つは、マローンが夜の散歩に行っている間に他の者は猿人に襲われてしまったのだが、猿人に捕まった後、逃げ出してきたジョン・ロクストンがマローンに出会い、猿人の王の容姿を話した場面である。

その年とった猿人は — どうやらそいつが親方らしいんだが — まるであから顔のチャレンジャーといったところなんだ。教授の魅力ひとつひとつを少しばかり強調すれば、老猿人ができあがるって寸法さ。ずんぐりして、肩幅が広く、分厚い胸、首なし、赤いあごひげ、ふさふさした眉毛、目のあたりにただよう、“なんの用だ！”とでもいいいたげな尊大な表情、そのほ

か、なにからなにまでびっくりするほどよく似てるんだよ。  
(p. 231)

もう一つは、実際にマローンが猿人の王を見たときの感想である。

ジョン卿のいったように、色が黒くなくて赤いという点だけをのぞけば、あらゆる点でチャレンジャー教授に生き写しだった。ずんぐりして背の低い体格、がっしりした肩、前のほうへだらりとたれさがった胸、胸毛とからみ合ったこわいあごひげ、どこを比べても瓜ふたつである。ただ眉毛の上だけは、猿人の額がつるりとうしろへすべって湾曲した低い頭部につづいているのに反して、チャレンジャーのほうは、それがヨーロッパ人らしい広い額と、巨大な頭の鉢になっている点だけが、鋭い対照を見せて、だれの目にも明らかな相違点となっている。(p. 241)

上記二つの引用文は、失われた世界でチャレンジャーたちが猿人と出会ったときに、彼の仲間がチャレンジャーと猿人の王とを見比べたときの感想である。二つ目の引用文で指摘されているように頭蓋骨の形だけが唯一の相違点である。それを除けば、彼はまさに猿人といえるのだ。ここで、頭蓋骨の形についての当時の思想に触れておく。

頭蓋学は十八世紀の半ば頃に創設されて、人間の知的発達と頭蓋の構造を関係づけようとした。この学問は時代を経るうちにすたれてしまい、今日残るものについては、……額が広ければきわめて頭が良く、狭ければ頭が悪いといった漠然とした感覚



を誰もが心にいただいているばかりである。……カンパーは、動物および人間のあらゆる種類・種族について頭蓋骨の形態論的構造を研究しているうちに、知性と脳の大きさの間に密接な関係があるとの確信をもった。額が高い人は頭脳の発達の程度が大きいが、額が後方に反っている場合は、頭脳が圧迫されて発達が妨げられる。(ダルモン 1992, pp. 23-4)

当時のこのような思想のため、チャレンジャーの頭蓋骨の形は猿人の頭蓋骨と違うのである。原始的生物から進化していった人間は、言語を持ち、文明世界を生きることによって脳が発達した。当時の白人は野蛮民族に関して次のような見方をしていた。白人と違い、額が反っている民族は脳が発達していない証拠だ。脳がまだ発達していないということは、発達段階にある白人の子供と同じことである。だから、野蛮な民族は大人でも白人の子供と知的には同じだとみなされていたのだ。

次に、チャレンジャーを構成するもう一つの要素、彼の天才的頭脳について見ていこう。物語の中で、窮地においては彼の頭脳は非常に役に立っている。失われた世界のある台地への架け橋を思いついたのも、その世界からの脱出方法として気球を作り出したのもチャレンジャーである。彼の仲間たちも彼のアイデアに頼りきっていた。そしてチャレンジャーも自分の頭脳には自信を持っていたのだ。その例として、次の二つの引用文をあげておく。一つは、台地と同じ高さの岩に登り、そこから木を倒して台地に橋を架けるということを思いついた場面である。

以前この若い友人に、G・E・C（チャレンジャーのこと）はどたん場でこそ真価を発揮するといったことがあると思うが、

ゆうべわれわれがすべて窮地に追いこまれていたことは認めるだろう。しかし、意志と知性がうまく組み合わせ、必ず道は開けるものなんだ。この深淵にかかるつり橋さえあればいいんだ。  
(p. 156)

もう一つは、台地からの脱出方法として考えた、気球を作る実験に成功した場面である。

「すばらしい！」負けずぎらいのチャレンジャーがすりむいた腕をさすりながら叫んだ。／「満足すべき完璧な実験だった！ わしもこれほどの成功は期待していなかったよ。諸君、わしは一週間以内に新しい気球を作ることを約束する。安全かつ快適に帰国の旅の第一歩を踏みだすことを期待してくれてもよろしい」(p. 281)

このように、ここではチャレンジャーの特徴、特に猿人的容姿について見てきた。そして、猿人の王の容姿と比べると同様の容姿でありながら、ずば抜けた発想のできるチャレンジャーは天才的頭脳を持つ猿人だと言えるだろう。

## II 猿人

次に、猿人とは何者の比喩かということを考えていく。この物語の中では、猿人はミッシング・リンク（類人猿と人間の中間にあったと想定されている動物）に相当するものとされている。しかし、もう少し詳しく知るために、物語での猿人の役回りを見てみようと思う。台地には恐竜や古代生物が住んでいるのだが、この地を支配しているのは猿人とインディアンだ。両者はそれぞれ違う過去のあ

る時期に台地に登ってきたのだ。猿人が先にやって来て住んでいたところに、遅れてインディアンが来たというわけだ。それ以来、両者は敵対関係にあった。そこへチャレンジャーたちがやって来たのだ。チャレンジャーたちは残酷で野蛮な猿人が支配する土地であってはいけないとして、人間であるインディアンに味方する。そして、台地を人間の支配する土地にしたのだ。このように見ていくと、猿人はチャレンジャーたち人間に支配される役回りとなっていることがわかる。

### Ⅲ 社会背景

次に、チャレンジャーがどうやって作られたのか、三つの社会背景から探っていく。それは植民地主義、犯罪人類学、そしてダーウィニズムだ。これらの要素が組み合わさってチャレンジャーという人物ができていくのだ。

最初に、植民地主義についてだが、これは前に述べた猿人の役回りを説明したところで察しがつくことだろう。19世紀、産業革命を終えた西欧諸国は外の世界へと目が向けられていた。海の向こうには未開の土地が存在しており、有益な資源が眠っている。その資源を自分の国のものとするため、競って植民地活動が行われていた時代であった。物語の粗筋と組み合わせると、猿人は野蛮人、原住民であると考えられる。それは次のようなことから示すことができる。物語の粗筋を簡単に説明すると、猿人はチャレンジャーたちが来ずずっと前から台地に住んでいた。この台地はまだ世の中には知られていない未開の地であった。しかし、チャレンジャーたちが恐竜を求めてこの地へやって来たことにより、この土地は人間の支配するところとなってしまった。というのも、猿人はチャレンジャーたちと戦うのだが、人間の持つ科学的な力である銃には及ばず、結

局、猿人は人間の支配下に降伏せざるを得なくなり、チャレンジャーたちはお目当ての恐竜も持って帰国したのだった。

このような物語の粗筋から、当時の西欧世界で盛んに行われていた植民地主義と結びつく。白人は珍しいものを求めて、自分の国を飛び出し、前人未踏の土地へやって来る。そして、そこに原住民が住んでいるにもかかわらず、彼らは侵入していく。彼らにとっては文明を持っている自分たちこそ優れており、原住民の生活は野蛮で劣ったものだという思想があった。そして、原住民に対して次のように感じるのだ。「優越した位置にある自分たちが、大国イギリスの庇護のもとにある人々に、文明の恩恵を与えていき、「劣った」存在である彼らを文明の高みに、あるいはそれに近いところまで引き上げようとしているのだ、という使命感である。」(木畑 1998, p. 9)

彼らはその野蛮な地を文明化する必要があると考え、それをすることが文明を持った者の使命なのだと理由付けることで侵略していくのである。そのため、彼らはまるでそこは自分たちのものであるかのように振る舞うのだ。原住民は彼らの支配下に置かれ、その土地の物資はもちろん白人のものとされて彼らの国に運ばれていくのである。このことから猿人は植民地時代における原住民と同様だとわかる。そして、恐竜はその国の資源をされており、先史時代で植民地活動を再現していることになる。植民地主義については、第二章においてさらに深く取り扱っていく。

次に、犯罪人類学について見ていこう。これは今では信用されていないが、イタリア人類学者のチェーザレ・ロンブローゾにより広められた学問である。簡単に言えば、この学問は、犯罪者は生まれながらにして犯罪者であるのだから、犯罪者に共通の頭蓋骨の形やその他の特徴から犯罪型の人間を定義づけて犯罪者とそうでない人

と分類することができる」と主張したものである。犯罪人類学によると、犯罪者の頭蓋骨を検証すれば次のことがわかるということだ。

頭蓋が左右対称ではなく、斜頭蓋症（頭蓋が平たくなっている）になっている場合、犯罪者は平均より四倍も多い。同じように額が反っていて顎が大きいのは、通常人よりも二倍も数が多い。大後頭孔も異常を示すことが四倍である。」（ダルモン 1992, p. 55）

また、犯罪ごとにも犯罪者の特徴をあげている。その例として、殺人者と押し込み強盗の特徴を載せておく。

髪は黒い縮れ毛で、肌は浅黒く、鼻は鉤のように曲がって変形した鷲鼻であり、顎はたくましく、犬歯の発達がいちじるしく、厚みのある耳は把手の形をして張り出し、頭蓋は平たい（斜頭蓋症）か円錐形（尖頭蓋症）をしていて、額が反り返っていて、眉弓は突き出ている、小頬骨がきわめて大きく、しばしば全身に刺青をしている。殺人の「常習犯」は斜視である。（ダルモン 1992, pp. 57-8）

これだけを見ると、まるで人を見かけで判断しているだけのように思える。しかし、これにはきちんとした理由があるのだ。これらの特徴にどんな意味があるのか、なぜこのような特徴が犯罪者の特徴だと言い切ってしまうのか。

実はこれらの特徴は犯罪者が類人猿、野蛮人と同じだということを暗示する。人間と類人猿との最大の違いは、頭蓋骨である。チャレンジャーと猿人の王の相違点を思い出してほしい。チャレンジャー

の頭は人間らしい頭であるのに比べて、猿人の頭は頭蓋が平たくて額が反っていることがわかる。なぜ類人猿、野蛮人が犯罪者と結びつくのかというと、彼らの行動を思い浮かべてみるとよい。動植物世界においての通常の行動（共食い、幼児殺し、親殺し、性的ライバルの排除）や野蛮な民族に見られる通常の行動（儀礼による食人、幼児殺し、親殺し）は人間世界を基準にすれば犯罪行為である。そこから、犯罪者とは進化の前段階に隔世遺伝した者と考えられたのだ。つまり、犯罪者と原始人との関連については、次のように考えられていたのだ。

この広い視野からすれば、「本能的犯罪者」とも呼ばれるようになっていた生来性犯罪者は、隔世遺伝の「副産物」つまり一種の後ろ向きの淘汰の有害な結果であり、人間と獣との恐るべき雑種、すなわち起源をたどれば遙かな暗い過去にさかのぼる退行の刻印をもつ人間ということになるだろう。この穴居人、つまり誤って文明の世界にまぎれこんできた生きた化石は、犯罪を犯す傾向や流血を好む反社会的本能を持っているが、それは動物の遺伝的特性を避けられなかった先祖の不完全な身体の記憶と名残から来るものなのであろう。（ダルモン 1992, p. 62）

このように、原始的な先祖から引き継いだ形質を遺伝的素質の中に持って生まれた者が犯罪者になるのだとされた。犯罪者は野蛮な行為をして生きていた先祖の動物的な特性を受け継いでいるがために、犯罪に走ってしまう。また、犯罪は遺伝するとも言われていたので生来性犯罪者がいなくなれば、犯罪はなくなると考えられていた。このような思想により、ロンブローゾ学派は西欧の植民地主義

が盛んに行われた 19 世紀において、社会に大きな影響を与えることとなった。それは、もし生来性犯罪者が類人猿、野蛮人と同じようなものとみなされるのであれば、原始的部族は本質的に犯罪者とみなすことができるというような考え方ができるからである。そう考えると、植民地主義に白人が原住民に行ったことに対して、肯定的な考え方を与えてしまうことになるのである。

最後に、ダーウィニズムについてだが、この言葉は誰でも一度は聞いたことがある言葉であろう。1859 年にイギリスの生物学者であるチャールズ・ロバート・ダーウィンが『種の起源』を発表することにより、進化論が一般大衆にも知られるようになった。『種の起源』の正式書名は『自然淘汰、もしくは生存競争に於いて嘉された種族の保存の方途による種の起源』である。進化論と言われるが、この本では“evolution”という今日私たちが使う進化という語ではなく、“descent with modification (変異による遺伝)”という言葉で表現されている。現代では、進化に対する考え方を最初にした人はダーウィンだと思いがちではないだろうか。私も本論文に取り掛かる前まではこのように思っていた。しかし、進化に対する考え方はダーウィン以前に存在していた。科学的な考えはいつも宗教が障害となり、それを普及させることはできなかったのだけなのだ。ダーウィンは自分の理論を発表するまでに二十年以上かかっていた。それは先駆者たちの失敗から理論に不完全な所が一つでもあれば、すぐにそこに宗教が入りこんでくるのをダーウィンはわかっていたからだ。そのために、自分の理論を支える多くの証拠が必要だったのである。彼は徹底的にデータを集めたのだ。自然淘汰という新しい考え方、反論する者に調査不足とは言わせない豊富なデータにより、ダーウィンは世界に革命を起こしたのだった。ここからは、ダーウィニズムの当時の社会への影響を説明する。はじめに自然淘汰説

について説明した文章を見ておく。

あらゆる個体はその種の他の個体とは軽微なちがい（変異 variations）を持って生まれてくる、とダーウィンは説く。それらの微少の変異の大半は何の結果ももたらさないが、生存競争の中でその個体に有利になるように働く変異も若干ある。不利に働くものもある。（マルサスが指摘済みだが）この生存競争は苛酷で、生存して成熟できる個体は一世代中に数えるほどしかない。不利な変異を持った個体は早々に死滅してしまうだろうし、有利な変異を持つ個体は生存して子をもうけ、有利な変異を次の世代に遺伝していくはずだ。こうして自然淘汰は、大自然の中にいつも生じている何億という変異を篩にかけ、支配的環境の中で最も役に立つ「適者」が存在していくことを許す消去・選抜の作用なのである。そして、こうした軽微な変異が何世代にも亘って引き継がれ蓄積されて、ついには新しい変種をつくるほどになるのである。（バーバー 1995, p. 381）

『種の起源』において、人間の話題は除外されている。それは、進化論の文脈に人間をおくことが、キリスト教の教えに反するものだからだ。キリスト教では神が創造した最初の間がアダムとイヴだという教えがある。そうなると、進化により動物が人間になったのだということはキリスト教の教えに反することになってしまうのだ。地球上の生物の頂点に立つ人間が書かれていないことは奇妙なことであるし、書かれていなくても猿から進化したのだということは理解されたのだ。そのため、ダーウィンの進化論をめぐる論争では、人間のことだけが問題となったのだった。人間について話題にできなかったとはいっても、生物の行動についての記述をする際には



わかりやすくするために、人間社会の行動を言及せざるを得なかった。これにより、生存競争、適者生存という考えから、強い者、適者が生き残り、弱者、不適者は生存すべきでないという考えが社会に浸透していくこととなった。

ダーウィニズムおよびそれを社会現象に適用したものとされる社会ダーウィン主義のきわ立った特徴は、自然科学の理論としては、またそれに依拠する社会学説としては、きわめて異例とも言えるほどの短時間のうちに、一九世紀の文明社会に大なり小なり受け入れられてしまったという点である。……一八五九年の末に公表されて以来、わずかに十年ほどで公認の説となり、社会現象にまで拡大適用されてゆくというのは、それが誰も予想できない以外な説であったのではなく、暗黙のうちに社会が期待していた説であったことを物語っているのではなかろうか。(富山 1995, p. 216)

このように、ダーウィニズムは社会に大きな影響をあたえることになったのだ。そして、この思想が、先に述べた植民地主義、犯罪人類学の基盤として機能するのである。

チャレンジャーは猿人の姿をしていても犯罪人類学の原始的な生物の持つ特徴にはあてはまらない。それに、植民地主義で見ると、被支配者ではなく、チャレンジャー自身が支配する立場である。そうなると、最初に定義した天才的頭脳を持つ猿人には別の意味があるということになる。

第一章では、チャレンジャーを猿人と定義して、この人物を作り出した社会背景を扱ってきた。チャレンジャーに対する一つの見方としては、彼は猿人の比喩とすることができ、そこから猿人とは何

かということを考えて。この物語は、当時のダーウィニズムという思想に根差したものであり、それと、犯罪人類学、植民地主義思想が組み合わさって出来ているのだと言える。ここではチャレンジャーは猿人としたが、植民地活動においての白人の役割も果たしているのである。

## 第二章 『失われた世界』に見るイギリス帝国の植民地主義

### I 作品世界

第二章では、まずこの物語の作品設定について考える。その際に、物語の背景にある植民地主義の理解を深めるため、ヘンリー・ライダー・ハガードの『ソロモン王の洞窟』を用いる。また、『失われた世界』は過去の世界のことを書いたものなので、それに関する社会背景についても見ていく。その後、英国紳士と植民地主義を結びつけ、植民地主義が当時では正当化されていた理由を探っていく。最後に、第一章で猿人とした見方をしたことも含めて、チャレンジャーを英国紳士とすることでこの章のまとめとする。

この章の最初では、『失われた世界』に見られる植民地主義について考えていく。第一章で論じたチャレンジャーと社会背景の関係でもわかるように、この物語はただの冒険小説ではなく、当時の社会的思想を元に書かれたものなのだ。この物語では、植民地主義時代においての原住民が猿人に、その土地にある財宝が恐竜にそれぞれ置き換えられている。なぜこのような設定となっているのか、別の作品とも比べながら探っていく。

まずは、『失われた世界』と同じように物語の設定として植民地主義を扱っているヘンリー・ライダー・ハガードの『ソロモン王の洞窟』(1885年)と比較してみよう。この物語の筋筋は次のような

ものだ。三人のイギリス人と一人の現地人が伝説のソロモン王の秘宝がねむるというアフリカ奥地の秘密の国を目指す。そして苦労しながらも辿り着くが、その国は横暴な王と不気味な老婆に支配されている国だった。しかし、仲間の現地人ウンバポがその国の真の王であると告白し、三人のイギリス人は彼がその国を取り戻す戦いに力を貸すことになる。その戦いは勝利を収めて、とうとうソロモン王の洞窟に案内される。彼らは案内役の老婆の罠にかかってしまいがちながらも、最後はダイヤモンドを手に入れ帰国するのだった。

この物語も冒険小説として楽しめるものなのだが、植民地主義思想を元にしたものなのである。『ソロモン王の洞窟』と『失われた世界』の物語を簡単に追ってみると、イギリス人がある目的の物を手に入れるために未知の世界へ行き、そこでの住人との戦争に勝利して目的の物を手に入れて帰国するということだ。『ソロモン王の洞窟』でも『失われた世界』でも読者を引きつけるのは未知の世界に辿り着いてからの戦争の場面であろう。しかし、そのようなところこそ、これから見ていく植民地主義と強く結びついている。

植民地主義と二つの物語の関連性を見よう。まずは、第一章でも触れたことだが、植民地主義とは原住民を文明化させるということである。文明が発達してヨーロッパの外の世界に目を向けた白人は財宝を手に入れるため、長い時間をかけて未開の地へやって来る。しかし、その場所にはすでに原住民が住んでいる。白人は野蛮な暮らしをしている原住民に出会い、文明を持たない彼らは劣等であるとみなすのだ。そして、財宝のあるその土地を占領して、彼らを自分たちの支配下におこうとする。しかし、突然やって来た者に住んでいる土地を奪われた原住民はこれに対して反抗するのだが、もちろん白人に勝てるはずがない。原住民は虐殺され、鎮圧されて彼らの支配下となるのだ。原住民の側から見れば、これは明らかに

侵略である。ところが、白人の側から見れば、野蛮な生活をしている彼らを文明化しているのだという。白人側の理屈によれば、これは正しい行為になるのである。

次に、二つの物語の粗筋とそこからわかる植民地主義を見ていこう。どちらの物語でも目的地までの道のりは長くて険しいので簡単には辿り着くことはできない。そして、やっと辿り着けた目的地にはすでにその土地を支配する住人が存在している。その住人は、『ソロモン王の洞窟』ではアフリカ奥地の国の王と老婆、『失われた世界』では猿人ということになる。両者は野蛮で残酷な描き方をされている。その例を一つずつあげておく。『ソロモン王の洞窟』では、魔女の人狩りという儀式が行われる。それは、王に不満がある者や財産がある者をガゴールという老婆とその仲間がかぎだして殺す儀式だ。

「殺せ！」／ツワラ王が低いが、強い口調でいった。／「殺すのじゃ！」／ガゴール婆もわめく。／「殺すんだ！」／スクラッグ王子は、この理由のないおそろべき殺人儀式に、酔っているかのように、うすら笑いをうかべてどなった。そのことばが終わるか終わらないうちに、殺人がおこなわれた。ひとりの殺し屋が、あわれな兵士の胸に槍を突き刺した。声もたてずにくずおれる兵士にとどめを刺すため、殺し屋が、重い棍棒をふりあげて、力いっぱい脳天にたたきつけた。兵士の脳みそが、あたりに飛び散った。(ハガード 1998, pp. 185-6)

『失われた世界』では、猿人が捕虜にしたインディアンを崖の下に落とす処刑の儀式を行っている場面がある。

猿人たちはインディアンの手足を持って、ものすごい力で前後に三回ふりまわした。それから恐るべき怪力をふるって、哀れな犠牲を高々と持ちあげ、崖っぷちから下に投げ落とした。あまりにもすごい力で投げたので、犠牲は最初空中に高く弧を描いてから落ちていった。インディアンの視界から消えると、見張り人をのぞいた見物人が全部、崖の縁にかけ寄った。(p. 242)

横暴で残虐性の強い王と老婆に支配されている国を見た英国紳士も、猿人というまだ人間とは言えない野蛮で残酷な生き物に支配されている台地を見たチャレンジャーたちも、この住人たちが支配する国を終わらせなければならぬと感じたのだ。そこには白人は優れており、原住民を劣った者とみなした人種偏見がある。そして、彼らは野蛮的なこの地に文明をもたらすために、住人たちとの戦争を起こすことになる。植民地主義思想を含んだ内容なので、その土地をかけての戦争で侵入者の側が勝利することは前提となっているが、多くの犠牲者を出す激しい戦いが繰り広げられて勝利を手にする。戦争について言えば、両者とも文明的なものをを用いている。『ソロモン王の洞窟』では、戦争時には武器は原住民と同じものを使ったが、王の臣下の者を英国紳士の味方につけさせようとする際に銃と皆既日食を使った。銃はこれを知らない原住民にとっては不思議な物と感じるし、皆既日食はその現象を知っていなければ非常に恐ろしい現象ととらえられる。銃と皆既日食、それぞれの場面で、原住民の象徴的な言葉があるので見てほしい。銃の場面では、銃で羚羊を殺してその力を見せつけたときに、インファードズ（最初に仲間となった原住民）が言った言葉である。「それがしは、はっきりとこの目で、魔法の力を見た。」(ハガード 1998, p. 111) 皆既

日食の場面では、「こ、こいつらが太陽を殺したのだ。このままでは、みんな闇のなかで死んでしまうぞ!!」（ハガード 1998, p. 216）と恐怖に陥ったスクラッグ王子の言葉がそれを象徴しているだろう。彼らは原住民にはない不思議な能力があることを思い知らせたのだ。『失われた世界』では、銃が使われており、多くの猿人が銃によって殺された。勝利を得たことで、野蛮な者に支配される土地から文明人に支配される土地となるのである。それを象徴するような言葉が『失われた世界』にある。それは次にあげる、チャレンジャーたちが味方したインディアンと猿人との戦いの後にマローンが語った言葉である。

チャレンジャーがいったとおり、これでメイプル・ホワイト台地における人間の支配は永遠に保証された。男は全滅し、猿人村は破壊され、女子供は鎖につながれて奴隷の境涯に生きていくために追い立てられていった。遠い昔からの長い相克はこのようにして血なまぐさい終末を告げたのだった。(p. 266)

勝利の後、目的の物を手に入れ帰国するという流れになるのだが、ここでは二つの物語に違いが見られる。『ソロモン王の洞窟』では、目的の物であるダイヤモンドはソロモン王の洞窟にあるのだ。そこで英国紳士たちはダイヤモンドを発見する。しかし、彼らは罠にかかってしまっており、出口を失っているため、すぐには出られない。英国紳士三人は洞窟の中を歩き回りようやく脱出するのだが、その際にダイヤモンドを持ち帰るのを忘れなかった。ここで、洞窟に閉じ込められて出口が見つからずに苦しんでいる彼らの様子がわかる文章を載せておく。

せめてトンネルの目的がなんであるかわかれば、対策もあった。が、それがわからない。おそらく鉱山の坑道だろうと、判断するしかなかった。だとすれば、鉱脈に沿って、トンネルは四方八方にのびていそう。出口を見つけるのは至難のわざだ。疲れはてたおれたちは、ついに立ち止まった。かがやきかけた希望の火が、また消えそうになる。最後の干し肉と水で食事をした。水はこのしておきたかったが、全員、のどがからからだった。(ハガード 1998, p. 306)

この物語ではダイヤモンドを手に入れるのに洞窟に入って、苦勞の末に脱出するところを見ると冒険的要素が大きいと言える。それは、この物語が『失われた世界』よりも前の1885年に出版されたことと関係があるだろう。この時点ではまだ南アフリカは英国の支配下とはなっておらず、これから支配下とされる場所だ。1886年にトランスヴァール共和国で金鉱が発見され、それからボーア戦争を経験していくことを考慮すると、未開の地の財宝を求める植民地主義の最初の目的と重なる冒険的要素がある土地だと考えられる。一方、『失われた世界』では、目的の物である恐竜を手に入れるのに『ソロモン王の洞窟』に見られるような苦勞は感じられない。ジョン・ロクストンがチャレンジャーのために翼竜の子供を仕留めて、それにこの地に来て偶然発見されたダイヤモンドの原石を手に入れて帰国するのだ。この物語には、恐竜とダイヤモンドの原石、二つの違う宝が存在してしまうことになるが、植民地主義のイデオロギーにしたがって考えれば、目的の物としていた恐竜は、ダイヤモンド同様未開の地の財宝となる。

二つの物語を比べれば、どちらの物語も文明人によって未開の地が文明化されることは正当な行為だと認められているという点で、

植民地主義的な物語となっていると言える。植民地主義とは、最初は、ヨーロッパの外の世界にある財宝を目的としたものだった。しかし、その地の原住民に出会い、野蛮な生活をしている彼らを文明化するという目的になってしまったのだ。それは文明国の白人は優れており、それ以外の人種は劣っているという見方をする彼らの人種偏見から来るものだ。そして、劣った原住民を文明化できるように導くことが白人の使命だとされたのだった。

『ソロモン王の洞窟』での、未開の地の財宝であるダイヤモンドを目指して、アフリカ奥地の国に行き、原住民を支配するという物語の粗筋を見れば、それが植民地主義と重なるものだという事はわかりやすい。一方、『失われた世界』は、恐竜は財宝に、猿人は原住民に置き換える必要がある。恐竜を手に入れるために、古代生物が生存する台地へ行き、そこで猿人を支配するという粗筋を見ると、植民地主義を元にかかれていたのだが、『ソロモン王の洞窟』のようにそのままでは当時の植民地主義と重ならない。この違いは『ソロモン王の洞窟』は社会背景として植民地主義しか扱っていないのに対して、『失われた世界』はそれ以外に、物語の設定を過去の時代とした当時の社会背景があるからだ。

なぜ恐竜と猿人が植民地主義における財宝と原住民の役割として登場することになったのか、『失われた世界』に含まれている社会背景を見ながら考えていく。この物語は、過去の時代を舞台とする科学的思想の物語である。科学は、今では当然のこととして考えられているものだ。しかし、それが発達して社会に受け入れられるようになったのは19世紀になってからのことである。この作品が発表されたのは1912年なので、その少し前からようやく科学が認められるようになった時期が来たのだった。

19世紀は地質学にダーウィン理論と過去の世界へ注目が集まっ



た時代であった。まずは地質学の論争について見てみよう。当時は科学と宗教が対立する時代であって、科学的思想が発表されればすぐに宗教が圧力をかけてきた時代であった。以下にあげるものが地質学の論争の始まりなのである。

十九世紀初頭の何十年かの地質学には論争が実にさまざまであったが、それらすべてとも関係する最大論争は地球の年齢をめぐるものであった。後に述べるが、アッシャー大司教が天地創造は紀元前四〇〇〇四年のことと算定していたものの、地質学を少しでも嚙じったことのある者にとって地球がただの六千年の齢だなどとは到底受け入れがたいことであった。……紀元前四〇〇四年説が首肯し難い理由として、地球が経験した明らかな大変動の多さということがあった。たかだか六千年という短時日に大陸が分離し、ある山が押されて隆起し、ある山が侵食されて土塊と化すというようなこと全てが生じ得るのだろうか。第一、化石の問題がある。地上に、もはや今日存在しない動植物の種が無数にあったことを示しているものたち。最初のうちはさしたる問題ではなかった。ノアの大洪水説で説明ができたからである。(パーバー 1995, pp. 305-6)

化石が発見されることで地球の年齢に関して疑問が浮かび上がってきたが、ノアの大洪水説で説明されていたのだ。しかし、さらに化石が発見されてこれでは説明できなくなってしまった。そんなときに、新たな理論が発表されたのだ。

キュヴィエは一八一二年に公刊した『四足獣の化石骨の研究』で地球が一連の大激変を経験してきたとするいわゆる天変地異

説を唱えた。キュヴィエは地球規模の大地震を考えているが、ともかくその激変のごとに地球全体の風景が一変し、その時生きていた全動植物が根絶されたとする。天変地異のたびに神は新たな天地開闢をした。キュヴィエが説くには、『創世記』が述べているのはこれらたび重なる天地開闢の最後の一回のことなのである。人間がうまれてきた最後の一回である。それ以前の天地創造のことを神がわざわざモーゼに教えることがなかったのは、それらが人間とは何の関係もなかったからだけのことだ。天地開闢の他の回と同様、問題の一回にも天変地異—ノアの大洪水—が続いたが、新たな創造がもはや必要でなかった点でこの回は特殊だった。神がノアを通じて、その時存在した種の大部分を存続させていたからである。(バーバー 1995, pp. 306-7)

この理論は『創世記』で述べているのは最後の一回であり、それ以前にも天地開闢はあったとすることで、『創世記』に反しない理論であった。理論を受け入れてもらうには宗教の教えに反するものであってはならないのだ。この理論により論争は落ち着くのかに思えたが、まだまだ化石は発見され続けることで問題も出てきた。そして、新たな理論も発表されたのだ。

化石によって、ここには見つかってもしこには見つからないというものもあれば、ある化石はほとんどどこにも見つかる。ただ一箇所にしか見つからぬものもある。一体なぜそうなるのか。(中略) いずれにしる英国の地質学好きの牧師たちは雄々しく闘い、厄介な事実が出てくるたびに何とかうまく取りこもうと腐心した。そうした涙ぐましい辻褄合せを一八三〇年に紛

砕し去ったのがチャールズ・ライエルの斉一説 (Uniformitarianism) である。(バーバー 1995, p. 308)

斉一説は次のようなものだ。「地球年齢がただの六千年という説に固執しない限りは、世界を震撼させる天変地異や超自然の事象の発生を措定したりする必要はない。斉一説は地球がそれより何百年も古くからあったことを前提としているのである。」(バーバー 1995, p. 309)

斉一説は当時では革命的な理論だった。現代では、地球年齢が六千年だと言う人はいない。しかし、当時ではこれは当たり前の考えだったのだ。そのため、この理論はその証拠があっても『創世記』に反するものであったため、受け入れられがたいものだったのである。

次に、もうひとつの科学的思想のダーウィン理論についてだ。ダーウィン理論はその専門家たちの間では、これに賛成、反対といった論争を巻き起こすものであったが、一般大衆は違うことに興味を示していたのだ。

一八七〇年代には、教育のある俗人の過半、科学者のほとんど全部が、自然淘汰説はこれを疑い、また無視しながらも進化説は事実であろうと諒解していた。……しかし、実際には時がたつにつれて、ダーウィン理論の科学的なほころびがいろいろと目立つようになっていった。なにしろ新聞が定期的に俎上に上げる話題がそれだけということもあって、一番人々の関心をそそったほころびが、即ち「ミッシング・リンク」が見つからないという点であった。もしダーウィンの理論が正しいのなら、種と種の間に移行形態がずっとひと繋がり存在しているはず

だというのである。(バーバー 1995, p. 402)

そして、人々の関心が高まったときに、偶然にも中間形態が発見されたのだ。

リトグラフに使う石版石の産出で名高いバイエルン地方の炭鉱で一八六二年、A・ヴァーグナー教授があらゆる時代を通じて一番有名な化石を発見した。とかげに似た尾椎、歯が植立した嘴、羽につめ付きの長い指を持った爬虫類と鳥類の中間形態、アルカエオプテリクス属の始祖鳥 (*Archaeopterix*) である。(中略) ほぼ同じ頃、アメリカの古生物学者オスニエル・C・マーシュはネコ大で四指の前趾をもつエオヒップス (*Eohippus* [ヒラコテリウムが正式名称]) が現生のウマに進化していったことを証す完全な化石を手に入れた。(バーバー 1995, p. 403)

これらは大きな発見といえるのにもかかわらず、まだ人々は要求した。それは人々が見たがっていたものが、次のようなものだからだ。「ミッシング・リンク一般ではなく究極のミッシング・リンク—猿とヒトの間を繋ぐ完全形の移行形態—」(バーバー 1995, p. 404)

これらの社会背景を見れば、地質学によって多くの化石が発見され、古い時代の生物たちの存在が明らかとなり、ダーウィン理論のミッシング・リンクから人間の祖先にも興味が示されるようになったのがわかるだろう。

過去の時代の生物は化石が発見されるから実際に証明されるのである。植民地時代の財宝も実際に証明されなければ意味がないもの

だ。植民地主義はヨーロッパ諸国が海外の世界から金銀財宝を見つけようとする白人の欲望によって始められたものだ。ただ見つけるだけでなく、それを自分たちのものとして利用できるようにしなければならない。そのために、その財宝の地に住んでいた原住民は野蛮で劣等の者たちとみなして、財宝を持ち帰る手伝いをさせるのによい労働力として自分たちの支配下に置いたのだ。恐竜もそれがいたことや過去を物質的に証明したいと思う者たちの欲望によって過去を証明する理由に使われたものだ。だから、当時多くの化石が発見された恐竜が植民地時代の財宝と同じ意味を持つのである。また、恐竜を持ち帰ることは当時の強い英国を象徴することにつながっていた。そのため、物語の中でチャレンジャーは恐竜を持ち帰らなければならなかったのだ。そして、物語の中で猿人はミッシング・リンクであるのだが、当時それが注目されていたこともあるだろう。それに、植民地主義で原住民はいずれ文明を持つ人間に支配される立場であって、人間とみなされる前の段階だ。進化の過程を猿、ミッシング・リンク、人とする中で支配される立場の原住民は人の前の段階であるミッシング・リンクとすることができる。そのような背景から、物語を過去の時代にしても植民地主義が成立しており、未開の地にある財宝としては恐竜、原住民としては猿人となっているのである。

## II 英国紳士と植民地主義

この物語でも『ソロモン王の洞窟』でも植民地支配を行うのは英国紳士である。これは、植民地時代の英国でも同じことだった。植民地活動を通じて多くの国を支配下においた大英帝国の中で、実際に現地に赴いて植民地を支配していたのは英国紳士と呼ばれる人々であったのだ。そこで、ここからはなぜ植民地支配を行うのは英国

紳士でなければならないのかということを考えていく。

英国人ではない人にとって、英国紳士とはこういう人物であると説明することは難しいことだ。私がイメージする英国紳士は、スーツを着て帽子をかぶり小奇麗な印象を与え、礼儀正しく洗練された人である。おそらく多くの人も英国紳士に対して、このようなイメージがあるのではないかと思う。今のこうしたイメージからでは植民地主義と英国紳士の関連は奇妙に見えるものだろう。しかし、当時の見方から英国紳士はどんな人のことを言ったのかということを見れば、それは問題なく解決する。まずは、英国紳士と呼ばれるための条件を理解することから始めよう。フィリップ・メイソンの『英国の紳士』によると、英国紳士の基準は特に決まっているわけではないのだが、英国紳士は支配階級に属していることに加えて、勇氣、寛大、責任感などの道徳的行為をとれる人でなければならないということだ。英国紳士は、支配階級に属しているということからわかるように、彼らは国を支配する立場の人間だったのだ。そして、紳士は人々から尊敬される人にならなければならなかったのだ。

まず、英国紳士の条件の一つである支配階級から取り上げよう。英国には階級制度があり、上流階級、中流階級、労働者階級に分かれる。支配階級は上流階級と中産階級のことである。当時は身分の差は人々には受け入れられていたことで、下層階級は上層階級を敬う気持ちがあったのだった。上流階級は貴族とジェントリのことだ。貴族は爵位がある一万エーカー以上の土地所有者のことで、ジェントリは爵位がない土地所有者のことであって、彼らは国会議員や治安判事の職に就いていた。上流階級の説明にわかりやすい引用文を載せておく。

ヴィクトリア朝の後半期の地代は、ふつう一エーカー当たり一

ポンドと見積もられているから、貴族の年収は、およそ一万ポンド、平均的なジェントリの年収が三〇〇〇ポンド、最低でも一〇〇〇ポンドの収入があった。収入の一部が投資活動につき込まれることはあったが、所領と投資から上がる定期収入は、地代にしても利子にしても、いずれも労働の報酬ではなかった。したがって、上流階級は、生活のために働く必要のまったくない人々だったのである。(長島 1989, p. 40)

中産階級は労働者を雇って事業を行うブルジョアジーと弁護士、医師、陸軍士官などの専門職だった。植民地が増大した英国では、国を統治する者を多く必要とした。「今までよりずっと幅広い支配階級も必要だった。それは陸軍士官、植民地の文官、裁判官、教員、国会議員、治安判事など、社会の支配者を生むべき階級だった。」(メイソン 1991, p. 232) そのため、紳士を作る工場とされていたパブリック・スクールも増大した。子供に教育を受けさせる余裕のある中産階級の家庭では、このときパブリック・スクールに金を投じて息子を紳士にさせようとしたのだ。そのため、中産階級の英国紳士が多く登場したのであった。植民地主義時代での英国紳士を考えると、大部分は中産階級に属する者たちであったのだ。

英国紳士になるということは、パブリック・スクールで教育を受けることと同じであった。それは、英国紳士のもう一つの条件である道徳性をそこで身につけることになるからである。パブリック・スクールとは人格を形成するための寄宿学校である。生徒は学問だけでなく礼儀を身につけ、スポーツを通じて体力的にも精神的にも鍛えられるのだ。パブリック・スクールには厳格な規律がある。その例を以下にあげておく。

風呂の水は冷たく寮は寒い。雨について走り粗食に耐える。……一年生が髪をまん中で分けたり両手をポケットに入れたりすればぶたれるかも知れないが、年々成長するにつれ、年下の者にはさせないように看視している事柄を、自らは行う権利を獲得する。ついには、かつては君主然とした監督生のために長靴を磨きバターを塗ってパンをさし出した新入生が、今度は、こういう雑用を自分のためにしてくれる雑用生を従える。(メイソン 1991, pp. 249-50)

そうやって生徒は男ばかりの身分社会の生活を通して人格を形成し、支配するということを学ぶのである。そして、次のような人物となるのである。「イギリスの植民地統治に要求される人材―肉体的、精神的にタフで、リーダーシップがとれ、決断力があり、孤独に堪えられる」(浜渦 1991, p. 73)

現代の私たちの感覚では英国紳士に関してはなんとなく良い人のイメージを抱きがちだが、過去に植民地支配を行っていたということを知ると、彼らは実は悪い人だったのではないかと考え直す人もいるかもしれない。しかし、当時の考え方と現代の考え方は違うということを念頭においてほしい。現代は平等主義を掲げており当時の植民地活動は批判されているが、当時は身分の差が認められていた時代で国を大きくするために植民地活動は盛んだったのだ。

そこで、平等主義の時代に生きる現代の私たちにとっては矛盾となる問題が出てくる。なぜ道徳性のある者が植民地主義を行ってもよいのか、言い換えれば、教育を受けたら植民地支配を行ってもよいのか。これを考えるには、ノブレス・オブリージュという言葉を理解しなければならない。「ノブレス・オブリージュ (*noblesse oblige*) は、フランス語で文字通り「貴族の義務」あるいは「高貴



な義務」を意味する。一般的に財産、権力、社会的地位には責任が伴う事を言う」(Wikipedia「ノブレス・オブリージュ」)日本にはこのような考え方はないため理解しづらいものだ。英国紳士は支配的立場の人間であるため、ノブレス・オブリージュという考え方から義務を負うことになる。この義務とは結局は国家に対する義務ということになる。英国紳士は未開の地を支配するときに、彼らが劣等とみなす原住民を文明化させるためだとしていた。これに彼らが使命感を感じていたことは、本論文の中でも言及してきたことだ。この使命感は英国紳士から見れば地位の下の者に対する義務ということになる。これに対して、上の者に対する義務も存在する。上の者とは国家のことだ。植民地支配は元はといえば、その地にある有益な資源が目的だった。それを考慮すれば、その地を利用できるようになれば、国益をもたらせることは確かなことである。そうなれば、英国紳士は立派に国に対する義務を果たしていることになる。このように見ると、英国紳士は国家のためになるように尽くす義務があるから植民地主義を行っていたのである。だから、ノブレス・オブリージュにより英国紳士が植民地支配を行うことは何も矛盾しないのである。現代の私たちの視点では植民地主義は悪いことだという認識があるが、当時ではそれは国家のために尽くすことであり、植民地管理を行う紳士たちは国に尽くす善人とされていたのだ。

### Ⅲ 英国紳士チャレンジャー

植民地支配と英国紳士についての理解を深めたところで、話題をチャレンジャー教授に戻そう。最後に、チャレンジャーは植民地主義時代の英国紳士に必要な要素すべてを合わせ持った理想の支配者であるということを示していく。

チャレンジャーは動物学者(社会的地位がある)であるというこ

とから英国紳士である。しかし、それにもかかわらず、物語の中で彼は教授職に就いていない。それは次にあげるチャレンジャーの言葉からわかるだろう。「高度な独創的研究の能力がある頭を、つまらん目的に向けるのは一種の冒瀆だというのがわしの持論なんだ。教育界に地位を提供されても、わしが頑としてふり向かなかった理由はそこにあるんだよ」(p. 196) このような言い分からは彼は社会的地位のある者にはつきものの義務を果たしていないように見えるが、そうではない。チャレンジャーの義務は教授になって学生を育てることではなく、別のものなのだ。チャレンジャーは恐竜の存在を証明するために台地へ向かい、それを国に持ち帰ってきた。これは国家のために働いたということと同じだ。恐竜を持ち帰ったという言い方をすると、これがなぜ国家のためなのかとなってしまいが、これを財宝あるいは植民地という言葉に置き換えればすぐに結びつくはずだ。彼は台地へ行き、その地を支配した。植民地主義時代において植民地を支配するということは、ただ未開の地を文明化させるという文明人の使命だけでなく、その地の資源や労働力となる原住民を自国のものとして支配することで国益をもたらすようにすることだ。それは立派に国家に対しての義務を果たすことなのである。

英国紳士は支配的立場であるため、体力、知力、道徳性を備えていなければならない。チャレンジャーもそれらを備えた人物だと言える。第一章では、チャレンジャーは猿人として扱ったが、これは英国紳士が必要とする体力につながるものを表していたのである。それは、現地での過酷な状況にも耐えられるように体力や多少の野蛮さは必要だったのである。猿人は体力があり力も強く野蛮な生き物だ。そのような体力が英国紳士には必要だったのである。だから、それを示唆するためにチャレンジャーは猿人だったのである。知力も第一章で指摘したように、彼は独創的なアイデアを思いつく頭脳を

持っている。それから、道徳性について言えば、チャレンジャーは、チャレンジャー、サマリー、ロクストンが猿人に襲われたときに、「じろじろ見てるのはやめて、いっそひと思いに殺せ、とやつらに叫んだ」(p. 231)とあるように三人の中で一番勇気があるところを示した。また、恐竜を持ち帰って証明しようとする責任感が強い(国に対して義務だ)ところも見られる。それに、チャレンジャーはリーダー的存在を感じさせる人物だ。このように、チャレンジャーは植民地時代の英国紳士なのである。だから、物語でチャレンジャーが台地を支配することは正当なこととされているのである。

第二章では、『失われた世界』の物語設定である植民地主義の理解を深めるために植民地主義を扱った『ソロモン王の洞窟』と比較した。それから、『失われた世界』は植民地主義に加えて他の社会背景も含まれていることから、財宝と原住民を過去の物に置き換えた理由を探ってきた。そして、英国紳士が植民地支配を行い、正当化した理由を当時の視点で理解していった。植民地主義は英国紳士の持つノブレス・オブリージュという考え方により、国のために尽くすということで正当なことだったのだ。さらに、台地を支配したチャレンジャーは彼の特徴から植民地主義時代の英国紳士であることを示してきた。チャレンジャーは当時の英国紳士の要素を組み合わせて作られた理想の英国紳士だった。そのため、ユニークなキャラクターとなっていたのである。

## 結 論

本論文では、チャレンジャーがユニークな理由を当時の社会背景を元に考えてきた。まずは、チャレンジャーは天才的頭脳を持った猿人だという見方をして、猿人とは何かということについても触れ

た。そして、チャレンジャーを形作った社会背景（植民地主義、犯罪人類学、ダーウィニズム）について説明した。三つの背景をまとめれば、適者生存という考え方が社会に広まり、それが犯罪人類学や植民地主義といった人種偏見につながっていったということだ。チャレンジャーは猿人の姿をしていても、犯罪人類学による類人猿や野蛮人の特徴は含まれていないし、植民地主義から見ても原住民の役割では決していない。そのことから、この猿人の姿には何か意味があることになる。それを知るために、物語の設定である植民地主義について詳しく理解する必要があった。ここでは『ソロモン王の洞窟』と比較しながら、植民地主義とは原住民を文明化させるための行為だということを説明した。その後、植民地主義を行った英国紳士とはどんな人なのか、植民地支配を正当化した理由を当時の視点から探った。それでわかったことは、支配者である英国紳士には国家への義務があり、それを果たすために植民地主義は正当なことであったということだ。そこから、台地を支配して恐竜を持ち帰ったチャレンジャーは客観的に見れば、国家のために植民地支配を行った英国紳士ということになる。それに、天才的頭脳を持った猿人の姿は英国紳士に必要な要素を表していたものだったのである。結論として、チャレンジャーがユニークな理由は、植民地主義を行った英国紳士に必要な要素が詰め込まれた理想の英国紳士として作られたからなのである。

しかし、本論文で扱ってきた社会背景はまだ説明不十分だと言える。そのため、これに対してさらに理解を深める必要があると感じた。それに、作者であるコナン・ドイルの思想について理解が不十分であったため、作者の思想とチャレンジャーの関連性を本論文では扱うことができなかった。これらのことを今後の課題としたい。

本論文を執筆することは、自分の視野を広げるきっかけになった

と私は思う。『失われた世界』が出版されたのは今からほぼ百年前のことだ。当時の社会背景を知るにあたって、当時の思想と現代の思想はかなり違っていたということは衝撃的だった。特に植民地主義について言えば、現代では批判されるものなのに、当時では正当な理由があってそれを行っていたのだ。今までは植民地主義を批判する側からしか見ておらず、それだけで植民地主義について知ったつもりでいた。しかし、それが正当なこととされていた当時の視点からも見ることで、初めて理解したと言えるのだと感じた。物事を見る角度を変えることで、新たな発見につながることを実感できた。それは今後の人生の中でも役立てていきたいと思う。

#### 参考文献

- カー, ジョン・ディクスン (大久保康雄訳) (1993) 『コナン・ドイル』、早川書房
- 河村幹夫 (1991) 『コナン・ドイルーホームズ・SF・心霊主義』、講談社
- 木畑洋一 (1998) 『大英帝国と帝国意識—支配の深層を探る—』、ミネルバ書房
- ゲールド, スティーヴン・ジェイ (浦本昌紀・寺田鴻訳) (1995) 『ダーウィン以来』、早川書房
- サイド, エドワード・W (大橋洋一訳) (1998) 『文化と帝国主義 1』、みすず書房
- シモンズ, ジュリアン (深町真理子訳) (1984) 『コナン・ドイル』、東京創元社
- ダルモン, ピエール (鈴木秀治訳) (1992) 『医者と殺人者—ロンブローゾと生来性犯罪者伝説』、新評論
- ドイル, コナン (龍口直太郎訳) (1970) 『失われた世界』、東京創元社
- 富山太佳夫 (1993) 『シャーロック・ホームズの世紀末』、青土社
- 富山太佳夫 (1995) 『ダーウィンの世紀末』、青土社
- 長島伸一 (1989) 『大英帝国—最盛期イギリスの社会史』、講談社
- バーバー, リン (高山宏訳) (1995) 『博物学の黄金時代』、国書刊行会

- ハガード, H・R (横田順彌訳) (1998) 『ソロモン王の洞窟』、講談社  
浜渦哲雄 (1991) 『紳士の植民地統治—インド高等文官への道』、中央公  
論社  
ピア, ジリアン (渡部ちあき・松井優子訳) (1998) 『ダーウィンの衝撃—  
文学における進化論』、工作舎  
メイソン, フィリップ (金谷展雄訳) (1991) 『英国の紳士』、晶文社  
本橋哲也 (2005) 『ポストコロニアリズム』、岩波書店

#### 参考資料 (ウェブサイト)

- ノブレス・オブリージュ — Wikipedia [http://ja.wikipedia.org/wiki/  
%E3%83%8E%E3%83%96%E3%83%AC%E3%82%B9%E3%83%BB%E3%82%  
AA%E3%83%96%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%82%B8%E3%83%A5](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8E%E3%83%96%E3%83%AC%E3%82%B9%E3%83%BB%E3%82%AA%E3%83%96%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%82%B8%E3%83%A5)  
(12/5)  
ノブレス・オブリージュ—hajime 「HaJime's HomePage」  
[http://www.hm.h555.net/~hajinoue/jinbutu/noburesuoburi-jyu.  
htm](http://www.hm.h555.net/~hajinoue/jinbutu/noburesuoburi-jyu.htm) (12/5)